

都立府中東高校硬式野球部一年間の公式戦記録（令和3年度（2021年度）秋～令和4年度（2022年度）夏）

本校は昨秋、今春、今夏の三つの公式戦で9試合を経験することができました（6勝3敗）。しかし決して順風満帆ではなく、新チーム立ち上げの夏休みはコロナ禍で二週間の活動中止、夏休みの練習試合はわずか4ゲームという不安だらけの状態で秋季大会を迎えました。春季大会前も、ある試合では捕手がいず、引退した三年生を起用したり、都大会進出を決めた直後の練習試合では「動ける」者が8名のため、相手チームに1名借りたりという苦境が続いていました。さらに春季大会後には、主力の捕手、主将が相次いで故障。5月後半から6月前半の4週間のゲームを全てキャンセルして、調整に努めました。6月下旬になってようやく故障者が復帰し、一か月弱で最終調整をして、選手権予選に臨みました。そんな波乱の一年間だったのです。練習試合は通算で大幅に負け越し、GWは全敗でした。

1 秋季大会

ブロック予選一回戦 ○7-3日大一高 「高校野球ドットコム」掲載

相手は数度の甲子園出場歴を持つ、東東京の名門私立で夏ベスト16校。本校は夏に登板した中村（府中8中）が体調不良で登板できない中、一年生左腕・鈴木（日野三沢中）が登板し、3失点の好投。7回裏、二死走者なしから5得点しての逆転勝利でした。二年前の夏も名門・法政相手に9裏二死走者なしから逆転サヨナラ勝利を取っています。

ブロック決勝 ●5-8安田学園 「高校野球ドットコム」掲載

都大会をかけたブロック決勝の相手も甲子園出場経験を持つ東東京の強豪・安田学園。両校二ケタ安打の打撃戦となり、接戦となった後半、相手外野手の、フェンスに衝突しての好捕や、終盤の3バントスクイズなど、甲子園を目指すチームの「勝利に対する執念」を学んだゲームでした。安田学園はこの後、都大会でベスト16に進出し、準優勝校・二松学舎大付とも接戦を繰り広げました。

2 春季大会

ブロック予選一回戦 ○9-8本郷（延長10回サヨナラ）

前半で最大5点のリードを奪われる苦しい展開でしたが、本校は8回裏に3点を奪って同点に。8-8のまま延長戦となり、10回裏、サヨナラ安打で逆転勝利。文武両道の進学校に苦戦し、本校は3投手の継投で16安打を浴びました。苦戦でしたが、強豪私立相手に逆転勝利という本校らしいゲームでした。

ブロック決勝 ○10-3芝（7回コールド）

相手は夏の東東京ベスト8校。本校は一回戦の苦戦を反省し、アップでアドバンテージをとって立ち上がりで攻略することを目標にゲームに臨みました。1～3回の序盤3イニングで7得点。8回コールドの快勝でした。「アップが1回表」。プレーボールまでに助走できるかが大事ということ学んだ試合でした。

東京都大会一回戦 ○7-5八王子実践

相手はまたしても私立強豪校。秋季大会では都立の実力校・八王子北を破り、強豪・堀越と5-6の接点を演じたチーム。この試合も両校二ケタ安打という打撃戦になりましたが、6裏、松澤（調布3中）の3ランホームランで突き放しました。中村は5失点完投。苦しい中盤で、本校の「売り」である中継プレーで二度刺したのが大きかったです。

東京都大会二回戦 ●0-10明大中野（5回コールド）

雨天中止が重なり、ベスト32をかけた二回戦は一日4試合の第4試合という、夏の甲子園並みの対戦。球場は人工芝の駒澤球場。16:00開始予定が大幅に遅れて17:23プレーボールという、本校にとっては何から何まで初体験のゲーム。相手はここ数年で評判となっている「マッショ軍団」、エースはジャイアンツカップ出場投手というチーム。対する本校は故障者続出で、当日までメンバーが組めるかも不安なチーム状況でした。ゲームは完全な力負け。本校はこの4試合で、夏につながる貴重な体験ができましたが、ハードだった春季大会4試合の反動に、ゴールデンウィーク明けまで苦しむこととなります。

3 第104回全国高等学校野球選手権西東京大会

二回戦 ○7-0都東村山（8回コールド）

昨夏、秋、春の公式戦を通じて、8試合ぶりの都立校との対戦。中村、松澤の二投手で継投し5安打無失点。8回表の先頭打者の代打・鈴木（調布3中）のサヨナラホームランで8回コールド勝利。中盤の走者一二塁のピンチで、本校の「売り」である二塁牽制で刺しました。主将・濱名（府中6中）が攻守に活躍しました。

三回戦 ○6-3都千歳丘

相手は本校と同じく「スポーツ推薦」を実施している学校。西東京はグラウンドに恵まれた、スポ選のある都立校同士の「星のつぶしあい」が1～3回戦で繰り広げられます。そういう点でイヤな相手でしたが、公式戦の経験値で上回る本校が、より落ち着いてプレー出来ていました。相手は2点を追う6回表、無死1・2塁で走者が連続死。本校は前日のミーティングで「接戦のビハインドほど走塁死に注意」と指摘しましたが、まさにその通りのプレーで相手を刺しました。捕手・福岡（狛江2中）が活躍しました。

四回戦 ●5-7駒大高（第三シード） 「高校野球ドットコム」掲載

相手は甲子園出場経験をもつ春のベスト16校。この夏、ベスト32に残った都立高は10校。その大半が強豪私立に玉砕する中、本校も1回表に3失点。しかし本校はここから本領発揮。両軍二ケタ安打の打ち合いとなり、本校はついに6回裏、富樫（調布7中）の逆転タイムリーで5-4の1点リード。先発の二年生左腕・鈴木は、2～6回を1失点の好投。しかし逆転直後の7回表に相手打線につかまり、再び逆転を許してしまいました。接戦ほど一つのミス、微妙な走塁が勝敗を分けることを学んだゲームでした。